

アオウミガメ

Chelonia mydas (Linnaeus)

環境省 絶滅危惧 II 類

- ◆ 形 態 4 脇はひれ状である。吻は短く吻端は突出しない。頭部背面の前額板が 1 対、眼後板が 4 対、肋甲板が 4 対、第 1 肋甲板と頂甲板が第 1 椎甲板で隔てられる点で他種と区別される。
- ◆ 分布の概要 夏季に亜成体が三陸沿岸に来遊する。太平洋、大西洋、インド洋、地中海の熱帯、亜熱帯に広く分布し、産卵場所は島嶼に多く点在する。国内での産卵場は屋久島以南の南西諸島、小笠原諸島である。日本近海でみられるのは北太平洋集団である。
- ◆ 生息状況 5~8 月にかけて小笠原諸島・琉球列島で海岸に巣穴を掘って 90~150 個ほどの卵を産みつける。孵化した幼体はただちに海中生活をはじめると、初期の生態については全く分かっていない。主に植物食である。三陸海岸は甲長 400~700mm の未成熟個体が成長するための重要な摂餌場所となっており、沿岸に生える海藻や表層から深度数十メートル付近を漂うハチクラゲ類などを捕食する。
- ◆ 脊 威 定置網や刺し網などによる混獲にともなう溺死。開発にともなう産卵環境の悪化・消失。
- ◆ 特記事項 ワシントン条約付属書 I 類。国際自然保護連合 (IUCN) レッドリスト絶滅危惧 I B 類。環境省レッドリスト絶滅危惧 II 類。
- ◆ 文 獻 1. 福岡拓也 (2016) 、2. Fukuoka *et al.* (2019) 、3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)

(木村 青史)

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus)

環境省 絶滅危惧 I B 類

- ◆ 形 態 4 脇はひれ状である。頭部は大きく、上顎の前端は尖ってかぎ状に曲がる。頭部背面の前額板が 2 対および小鱗板 1 枚、眼後板が 3 対、肋甲板が 5 対（変異が大きく 6 対以上の個体も存在する）、第 1 肋甲板と頂甲板が接するという点で他種と区別される。
- ◆ 分布の概要 本県では夏季に亜成体が三陸沿岸に来遊する。太平洋、大西洋、インド洋、地中海に分布し、温帯、亜熱帯に産卵場所を持つ。国内での産卵場は本州中部（石川県、宮城県）以南から九州の太平洋岸、南西諸島。日本近海でみられるのは北太平洋集団である。
- ◆ 生息状況 5~8 月にかけて小笠原諸島・琉球列島の海岸に巣穴を掘って 100~120 個ほどの卵を産みつける。孵化した幼体はただちに海中生活をはじめ、多くは黒潮によって北太平洋に運ばれる。個体によっては、メキシコのバハ・カリフォルニア沖まで回遊する。甲長 600mm 程度に成長したのち、日本近海に戻ってくる。主に動物食である。三陸海岸は未成熟個体が成長するための重要な摂餌場所となっており、クダクラゲ、ウニ、甲殻類などを捕食する。
- ◆ 脊 威 定置網や刺し網などによる混獲にともなう溺死。開発にともなう産卵環境の悪化・消失。
- ◆ 特記事項 ワシントン条約付属書 I 類。国際自然保護連合 (IUCN) レッドリスト絶滅危惧 II 類。環境省レッドリスト絶滅危惧 I B 類。
- ◆ 文 獻 3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021) 、4. 檜崎友子 (2010) 、5. Narazaki *et al.* (2015)

(木村 青史)

ヒガシニホントカゲ

有鱗目 トカゲ科

Plestiodon finitimus Okamoto et Hikida

環境省 なし

- ❖ 形 態 幼体は背面から体側にかけて5本の淡黄色縦帯が入り、尾は鮮青色を呈する。成体になると体色は茶褐色となり体側に暗褐色縦帯が入るが、雌では幼体時の体色がある程度残ることが多い。県内では左右の前額板が接しており、胸部鱗列数が26列の個体が多く出現するが変異は大きい。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、滝沢市、零石町、紫波町、西和賀町、大槌町、岩泉町、普代村、軽米町で確認されている。国後島に加え、国内では北海道、東北地方、中部地方、近畿地方に分布する。
- ❖ 生息状況 昼行性で隙間の多い環境に生息し、市街地から農地周辺、森林の開けた場所などの日当たりの良い場所を好む。県内における生息数はそれほど多くないと思われる。
- ❖ 脊 威 宅地開発や工事などによる生息環境の消失および連続性の分断。
- ❖ 特記事項 2012年にニホントカゲが細分化され、東日本集団がヒガシニホントカゲに分類された。
- ❖ 文 献 3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、6. Okamoto, Hikida (2012)、7. Okamoto *et al.* (2021)

(木村 青史)

情報不足

タカチホヘビ

有鱗目 タカチホヘビ科

Achalinus spinalis Peters

環境省 なし

- ❖ 形 態 背面は褐色から暗黄褐色を呈し、正中線に1列の黒色鱗がみられる。体全体に構造色の光沢がある。鱗は皮膚と融合しており、重なり合うことはない。鱗間の皮膚が露出しているため、乾燥や高温に対して極めて脆弱である。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、大船渡市、北上市、遠野市、一関市、陸前高田市、住田町で確認されている。国内では本州、四国、九州に分布し、中国南東部にも分布するとされる。
- ❖ 生息状況 低地から山地の林床に生息する。夜行性で日中は倒木や落ち葉の下などに隠れる半地中性である。主にミミズ類を捕食する。県内における生息数はそれほど多くないと思われる。
- ❖ 脊 威 生息環境の分断・消失および林床の乾燥。側溝への転落や移動阻害による斃死。
- ❖ 特記事項 県全域における分布の把握に努める必要がある。
- ❖ 文 献 3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、8. 山崎陽平 (2014)、9. 山崎陽平 (2018)

(木村 青史)

情報不足

シロマダラ

有鱗目 ナミヘビ科

Lycodon orientalis (Hilgendorf)

環境省 なし

- ❖ 形態 背面は灰桃色で、45~60 の黒褐色横斑が規則的に並び横縞模様となる。眼前板がなく、肛板が 2 分し、胴中央部の体鱗が 17 列という点で他種と区別される。頸部の体鱗は主に 19 列であるが、頭胴長の大きい個体では 21 列になることもある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮吉市、花巻市、北上市、久慈市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、零石町、岩手町、葛巻町、西和賀町、住田町、九戸村、一戸町で確認されている。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 低地から山地にかけて生息する。夜行性で日中は倒木や石の下、石垣、建造物の隙間などに潜んでいる。ヒガシニホントカゲやニホンカナヘビ、小型のヘビ類を捕食する。
- ❖ 脊威 森林伐採などの開発による生息環境の分断、消失。路上での轢死。
- ❖ 特記事項 日本固有種。全域における分布の把握に努める必要がある。
- ❖ 文獻 3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021) 、9. 山崎陽平 (2018) 、10. 木村青史 (2017)

(木村 青史)

情報不足

ヒバカリ

有鱗目 ナミヘビ科

Hebius vibakari vibakari (Boie)

環境省 なし

- ❖ 形態 背面は一様に褐色から暗灰褐色で、目の後方に淡黄色の斑紋がある。眼前板があり、頸部から胴中央部の体鱗が 19 列、後半が 17 列で、体鱗の外側 1、2 列を除いて各鱗に明瞭な隆条がある点で他種と区別される。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、花巻市、北上市、遠野市、一関市、陸前高田市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、葛巻町、西和賀町、住田町で確認されている。国内では本州、四国、九州および周辺の島嶼に分布する。
- ❖ 生息状況 低地から山地の樹林や河畔林、水田などの水辺に生息する。主に夜行性で、カエル類の幼生や魚類などを捕食する。県内における生息数はそれほど多くないと思われる。
- ❖ 脊威 森林伐採や水田放棄による生息環境の乾燥化。餌資源の減少。
- ❖ 特記事項 日本固有亜種。県内における分布の把握に努める必要がある。
- ❖ 文獻 3. 日本爬虫両棲類学会編 (2021) 、11. Guo et al. (2014) 、12. 中村健児・上野優一 (1963)

(木村 青史)